玉池仙館主人　永坂石埭の狂俳

冨田和子*

はじめに

永坂石埭は、『日本人名大辞典』（ジャパンナレッジ）に、

永坂石埭　ながさか-せきたい一八四五－一九二四　明治-大正時代の医師、書家、漢詩人。弘化二年九月生まれ。漢詩は森春濤門下の四天王のひとり。明治七年ごろ上京し、神田お玉ケ池の梁川星巌旧居跡に医院玉池仙館を開業した。書もよくし、石埭流といわれた。晩年は郷里名古屋にもどり、大正十三年八月二十四日死去。八十歳。本名は周二。

と、紹介される人物である。

ところで、椙山女学園大学図書館に山崎敏夫文庫がある。この山崎敏夫〔明治三十四（一九〇一）年七月三十日～昭和五十三（一九七八）年四月三日〕は、歌人、国文学者として『日本近代文学大事典』（ジャパンナレッジ）に紹介され、愛知県立大学学長等を歴任した人物である。[1] 本学との関りは、「山崎敏夫年譜」[2]によれば、家政学部非常勤講師にはじまるようである。その後、椙山女学園監事を務め、特に、家政学部しかなかった本学に、昭和四十四年の短期大学部開学に際し尽力され、主任教授として、愛知県立大学退官後に着任されたとのことである。私は山崎と面識はないが、今も山崎を知る教授たちからの信望はとても厚いと感じている。没後、寄贈いただいた和歌・短歌関係を主とした国文学関係の図書は『椙山女学園大学図書館所蔵山崎敏夫文庫目録』（一九八七年刊）で確認できる。

この文庫所蔵の川島丈内著『名古屋文學史』二版（一九三三年刊）には、赤線やいくつかの書き込みがある。その中の永坂石埭の項は特別で、没年の干支と月日が加筆され、明治四十四（一九一一）年の新聞の切り抜きかと思われる石埭の篆刻の紹介記事[3]が貼付され、「永坂石埭翁」と題されたブロマイド風の紙[4]（図1）が挟み込まれてある。山崎はこの切り抜きを『名古屋文學史』二版を入手するまで二十年以上も持ち続けていたのかどうかわからないが、永坂石埭にかなり傾倒していたと思われる。

もしもこの書き込みが、出版直後に入手された頃のものであれば、山崎は、当時、三十三歳（数え年）[5]、歌人としても、また、和歌・短歌の研究者としても活躍し、愛知県第一高等女学校教授（文部省）を務めていた時である。

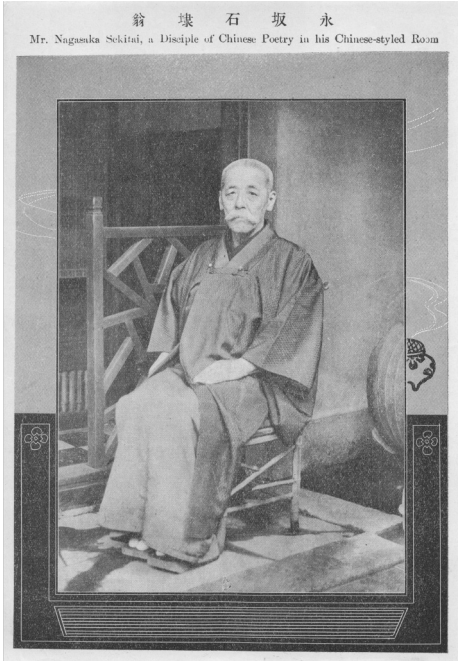

図1

さて、永坂石埭が、東京医学校（のち帝国大学医科大学、東大医学部の前身）で教授をしていた頃から、退職して神田のお玉が池にあった梁川星巌旧宅（東京神田松枝町二三番地）で開業していた頃の数年間、桑弧社の名誉社員評者として狂俳形式に関わっていたことが判明した。そこで、山崎が傾倒した石埭の知られざる一面として、狂俳形式の句及び撰句を考察したい。

末尾に、現存する『桑弧集』初編～第十三編[6]から、表1「玉池仙館（永坂石埭）の狂俳一覧」を付したのでご一読いただきたい。

なお、引用に際し、ルビは概ね省略し、適宜、句読点を補った。異体字を含め漢字は原則として通行字体に改めたが、例外もある。

一　永坂石埭略年表

まず、永坂石埭について全く知らなかったので、略年表を掲出する。主に、『永坂石埭――その文人的素顔』（大野修作監修　井谷五雲著　アートライフ社　二〇一九年）所収の、「永坂石埭略伝」を大いに参照し、適宜、新聞記事などで補い、狂俳関係事項を記載した。なお、適宜『永坂石埭――その文人的素顔』の主な掲載頁を（　）内に記載した。詳細は同書をご参照いただきたい。年齢は数え年。◎は狂俳関係事項。朝日新聞記事は聞蔵Ⅱビジュアルで検索。

○弘化二（一八四五）年九月二十三日生。本名は周または周二。字は希荘または周二。号、石埭。ほかに曼道人・曼陀道人・玉池舫人・一桂堂・曼梅主人などと署し、その居を夢樓・斜庵・玉池仙梅・玉池仙館などと称した。

尾張藩医永坂氏の支家で初代は順治、二代は周二。そして三代周輔（のち周二）は御目見医師（外科専門）・狂歌師。諱は徳彰、号は一桂堂（一八〇七～一八六七）で、石埭はその長男。名古屋城下、今の名古屋市西区上富町に生まれた。基礎学は藩校、本道（漢方の内科系医学）・外科を父に学ぶ。

○安政六（一八五九）年　十五歳、三河岡崎に赴き曽我耐軒の門に漢学詩文を学び、のち森春濤に師事（永坂家にある『大正名家録』記事）。（六六頁）

・漢詩は初め曽我耐軒に、ついで（中略）同郷の漢詩人である鷲津毅堂と森春濤について学んだ。（中略）また尾張藩が招聘した清国

の詩人である金加穂にも学び、合わせて鷲津毅堂に詩文を学ぶ傍ら、中国文学・絵画・茶道に精通した。しかし生前、詩集を編することはなかった。（七〇頁）

○明治戊辰戦争〔慶応四（一八六八）年一月三日～明治二（一八六九）年五月十八日〕二十四～二十五歳　藩医の四代目として従軍し、有栖川宮熾仁親王（征東大総督）の護衛隊に加わり江戸城に入った。

・公務のかたわら和泉橋医学校（東大医学部の前身）で学ぶ。

○明治五（一八七二）年　二十八歳　第一大学区医学校（東大医学部の前身）に入り、ドイツ人ホフマンに内科学を学ぶ。

○明治七（一八七四）年　三十歳　東京医学校（のち帝国大学医科大学、東大医学部の前身）に勤務。明治二十二（一八八九）年まで（四十五歳）。

・この頃、東京医会の幹事となる。（六八頁）

・神田のお玉が池で購入した家が梁川星巌旧宅（東京神田松枝町二三番地）であった。永井荷風『下谷叢話』[7]にも紹介され、「明治七、八年の頃に至り名古屋藩の医にして詩を森春濤と鷲津毅堂とに学んだ永阪（ママ）石埭が、星巌の邸址を探り求めて新に亭榭（ていしゃ）を築き、顔して玉池仙館と称した。其処（そこ）は神田区松枝町二十三番地である」（六九頁）とある。（傍点は冨田による。）

・明治七年の昔からつい此頃まで翁が住み馴れた東京神田松枝町二三番地の旧宅は俗に神田のお玉が池と呼ばれ、有名な詩人の梁川星巌の玉池吟社の祉（ママ）（址）であった、初め翁は夫れを、知らなかった処鷲津毅堂、小野湖山の両氏から詩人星巌の旧祉（址）であると聞いて大喜び、火事が名物のお江戸真中、而も火に縁のある神田を去るに忍びずして玉池吟社の祉（址）を永住の地と決め、二〇〇余坪の土地を求めて好む儘に支那風の書斎を三つまで設けた（「新愛知」大正五年五月二十一日「石埭詩人と其雅房」より）。（七〇頁）

○明治十七（一八八四）年　四十歳　五月十五日に従来の履歴により医師免許を下付されている。（六六頁）

◎明治二十一（一八八八）年　四十四歳　名誉社員評者として桑弧社に参加。「桑弧集初篇課題[9]」の見返しに「陶冶性霊」揮毫（図2）。「桑弧集」初編（十月刊）に題辞[10]を揮毫。同十三編（明治二十六年五月刊）まで名誉社員評者として撰句。同九編（明治二十四年八月刊）までの石埭の掲載句は、末尾の表1「玉池仙館（永坂石埭）の狂俳一覧」参照。

○明治二十二（一八八九）年　四十五歳　東京医学校（のち帝国大学医科大学、東大医学部の前身）を退職して開業。

○明治二十三（一八九〇）年　四十六歳　長瀬商店が石鹸を製造販売するにあたって、石埭はこれを「花王石鹸」と命名し、効能書と題字を書いた。整腸薬「ウルユス」の看板、いすゞ自動車のロゴ、名古屋の銘菓「両口屋」の屋号、或は福助足袋の題字も石埭の筆によるものである。（七一頁・引用に際し、掲載図は省略した）

◎明治二十四（一八九一）年　四十七歳　「桑弧集」九編（八月刊）の題辞の識語に「玉池遊讀并識　石埭（印）」

○明治二十八（一八九五）年　四十九歳　「鷗夢新紙」（森川竹蹊編。詩文風流の雑誌）に当世名家の一人として寄稿がある旨の記事あり（朝日新聞一月三十日東

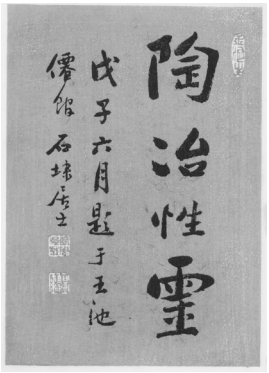

図2

京版　朝刊五頁）。
◎明治二十八（一八九五）年「追薦集」（東京　成錦舎　十二月刊）[11]の題辞を揮毫。末尾に「乙未十二月題于玉池仙館之祭詩、龕石埭居士周　印」
○明治三十四（一九〇一）年　五十七歳　朝日新聞三月十三日（東京版　朝刊三頁）に七言絶句掲載。以後、同年内に漢詩十三首、同三十七年三月に漢詩一首掲載。
・十二月二十二日、芥舟翁[12]追悼会に、榎本、長岡両子爵らと共に出席（朝日新聞十二月二十三日東京版　朝刊一頁）。
○明治三十六（一九〇三）年　五十九歳「清国葉松石氏没す」（朝日新聞三月二十一日東京版　朝刊二頁）に、葉松石（明治九年に来日し、外国語学校の教師として二年間在留）との深い関りが窺える記載あり。
○明治三十九（一九〇六）年　六十二歳　東京帝国大学に整形外科学講座の開設にあたり、初代教授田代義徳より助言を求められ、整形外科という医学用語を考案。（六六頁）
・日下部鳴鶴（明治以降の書家第一人者として高名）ら五十余名の書家とともに日本美術協会退会（朝日新聞九月二十日東京版　朝刊四頁）。
・十月十三日、森槐南、佐々木信綱らと総勢七名で、軽井沢の別荘で療養中の末松青萍（謙澄）博士の招きに応じ、碓氷の紅葉狩りに出かける〔茶毘庵「紅葉狩（一）」（朝日新聞十月二十五日東京版朝刊　五頁）〕。
○明治四十三（一九一〇）年　六十六歳　「鐵筆歴」第十二回に「麦秋至」の篆刻作品紹介（朝日新聞六月一日東京版　朝刊七頁）。
・伊藤博文（一八四一～一九〇九）の一周年忌（十月二十六日）に墓前に据付けた石灯籠一対の題字を末松子爵（謙澄。伊藤博文の娘婿）が選定し、石埭が揮毫（朝日新聞十月十二日東京版　朝刊二頁）。
○明治四十四（一九一一）年　六十七歳　「安楽椅子」に「△石埭居士の詩龕祭」と題した記事あり（朝日新聞一月十五日東京版　朝刊六頁）。
・石埭先生書『前赤壁賦』（石埭の最初の書の手本。吉川弘文館・川瀬書店発行。八十銭）の広告掲載（朝日新聞一月二十六日東京版朝刊一頁）。他に、同二月十日「●新刊雑書」にも紹介あり。
・森槐南逝去の際、朝日新聞から取材を受ける（「▽永坂石埭氏談」朝日新聞三月八日東京版　朝刊五頁・「●故森文学博士　▽永坂石埭氏談」同三月九日東京版　朝刊五頁）。
・永坂石埭先生揮毫『後赤壁賦』（吉川弘文館発行。七十銭）の広告掲載（朝日新聞三月二十二日東京版　朝刊一頁）。
・「碧巌句印」第四回（朝日新聞五月十六日東京版　朝刊七頁）、第十三回に「千聖不傳」の篆刻作品紹介（同六月二十六日東京版　朝刊七頁）。
・「鳥迹叙形」に「一徑白雲」の篆刻作品の紹介記事[13]。
○大正三（一九一四）年　七十歳　郷里の名古屋に戻る。
・名古屋市西長者町二丁目（「新愛知」大正五年五月二十一日「石埭詩人と其雅房」より）。（六九頁）
○大正六（一九一七）年　七十三歳　名古屋市長者町三丁目松坂屋所有の残月庵に隠れ、傍らに一桂堂を建てて東海文墨の雄として老後を送る。（七一頁）
・玉池仙館（旧宅）を鰹節問屋イ號（にんべん）主人高津伊兵衛氏に譲渡。（六九頁）

○大正十二（一九二三）年　七十九歳　九月一日関東大震災で玉池仙館（旧宅）消失。
○大正十三（一九二四）年　八十歳　八月二十四日十一時没。脳溢血。（七一頁）
・『石埭翁詩稿』十三冊（蓬左文庫蔵）[14]・『石埭翁印譜』・『名古屋八景詞』・『横浜竹枝詞』・『新潟尋句図詞』・『石埭書前赤壁賦』・『石埭後赤壁賦』各一冊が残る。（七一頁）
・名古屋市東区の照遠寺に葬られたが、現在は平和公園内の照遠寺墓域内に先祖の墓とともに移されている。（七一頁）
・碑銘は「石埭先生之墳」と自筆のものと思われる篆書で刻されている。法号は「孝徳院猷學石埭日周居士」。東京新宿区原町の幸国寺に分骨されている。（七一頁）

石埭について全く知らなかったが、こうして確認すると、石埭は、恵まれた環境の中、高い教養を培い、医師、書家、漢詩人の各分野で活躍し、いずれも一流の評価を得た人物であった。そして、長命で、後半生を市井の中、文人として生きた人物であったことがわかった。

因みに、石埭が亡くなった時、山崎は二十四歳。京都帝国大学の学生であり、在学中に孤児となるも、『アララギ』を退会し『水甕』の歌人として活躍していた頃である。山崎は石埭の生き方に共鳴するところがあったのかもしれない。

二　永坂石埭（玉池仙館主人）と桑弧社

桑弧社は、明治二十年頃、東京で撫松堂安楽（柴田芳洲。日本画家。柴田英次郎　一八四〇～一八九〇年）、青松庵飛猿（俳優。市川団六。市川飛猿。高木兼次郎　？～一八九一から一八九五年の間に没）、白鴎舎五湖（狂言作者。佐橋冨三郎　？～一八九三年）の三名で結成し、明治二十一年十月「清警冠句」と角書した句集「桑弧集」を発行した。この初編（明治二十一年十月刊）の安楽跋文に発足の趣意を記す。これについては、既に「明治期の俳文芸意識の魁――東京「清警冠句」と狂俳」（「東海近世」第十八号（二〇〇九年五月））で考察した。「桑弧集」は十三編（同二十六年五月刊）まで現存する。そして、桑弧社は、「三尾濃勢遠駿甲信」に支部を持ち、京坂・中国地方にも同好者がいた（「清警冠句追薦集」東京　成錦舎明治二十八年十二月）。この初代社長は安楽で、六編（同二十三年十月刊）まで編集した。また、「清警冠句」と角書し、桑弧社第一美濃部　平子春載編の「窓の友」四十二編（土岐。同三十四年九月刊）が現存するので、桑弧社は少なくとも明治三十四年までは存続したかと思われる。

さて、石埭は「桑弧集」初編の募集要項である「桑弧集初篇課題」に、玉池仙館主人の表徳号で、名誉社員評者として名を連ねる。前項で確認したとおり、「玉池仙館」は石埭の住まいにつけた名称である。この明治二十一年は四十四歳、東京医学校（のち帝国大学医科大学、東大医学部の前身）を退職して開業する前年にあたる。

まず、石埭と、桑弧社の発起人三名の関りをみたい。

当時、安楽（柴田芳洲）は一流の日本画家[15]で、美倉橋近くの神田川沿いの神田区佐久間町三丁目廿一番地（現在の千代田区神田佐久間町三丁目）に住み[16]、飛猿（高木兼次郎）は歌舞伎役者で俳諧を嗜み[17]、神田川沿いの日本橋区元柳町拾番地（現在の東日本橋二丁目二七～二八番あたり）に住み、五湖（佐橋冨三郎）は春木座の座付き作者で本郷区春木町一丁目廿二番地（現在の文京区本郷三丁目）

に住んでいた。そして、飛猿ははっきりしないが、安楽と五湖は尾張（愛知県）出身である。一方、石埭も尾張出身で、神田松枝町二三番地（現在の千代田区岩本町二丁目）に住んでいたから、同郷で現在の秋葉原駅周辺、半径七〇〇m以内に住む文化人のつながりであったろうことが窺える。

次に、末尾の表1「玉池仙館（永坂石埭）の狂俳一覧」で分かるとおり、石埭は初編～十三編の内、三編を除く、初編（明治二十一年十月刊）から九編（明治二十四年八月刊）までの三年間に、二十番句までに選ばれた七十句が載る。但し、六編（明治二十三年十月刊）からは附録月次集の抜粋等に載ることが多くなる。石埭は医業の傍ら、漢詩人としても書家としても活躍していたから、おそらく月次会には参加するものの、次第に「桑弧集」の作句までは手が回らなくなったのであろう。

とはいえ、名誉社員評者としては、八編・十編～十二編を除いて十三編まで務めている。六編あたりまでとその後の桑弧社との付き合い方が微妙に変化したのは、初代社長の安楽が六編の編集までで亡くなっていることも影響したのかもしれない。

また、石埭は「支那風の書斎を三つまで設けた」程、支那好みであったようだ。おそらく石埭のことを題にしたと思われる句が『桑弧集』初編に載るので引用する。○付き数字は撰句順位。

支那癖先生　戸棚に昼寝して御座る　　玉池：五湖評⑤
支那癖先生　紅の名刺（なふだ）で暑気見舞ふ　　玉池：五湖評⑮
支那癖先生　冬至にや堅ふ朋友呼ぶ　三河　一聲：玉池仙館評⑳

支那癖先生　奥様十文（と）八分召す　　安楽：若葉家評④

初めの二句は、作者名欄に「玉池」とあるので石埭本人の作であろう。他にも、自分のことを詠んだと思われる句が一句あった。

蓮飯　　白衣に蚊の血付ケて居る　　玉池：豊年評⑧

三句目は一聲の作を石埭が二十番句に撰んだもの。四句目は安楽の作で若葉家が四番句に撰んだもの。この句の「十文（と）八分」はおそらく足袋のサイズであろう。一般的な「十文（と）七分（ひち）」（約二五・五糎）よりも一分大きい。おそらく大柄な女性であったことが窺える。

石埭は、おそらく自分のことを「支那癖先生」と題にされても、気楽に作句した様子が窺えるし、奥様のことを詠んだ安楽の句を若葉家が撰んでも、怒って交流を絶つこともしていないから、桑弧社の、特に安楽とは親しい間柄であったろうと思われる。

因みに、『桑弧集』二編にも、次のようなおそらく仲間内では個人を特定できそうな題が出された句が載っている。

祠掌の清臣さん　英語こなして洋酒飲む　斐文：玉池仙館撰
祠掌の清臣さん　贊詞に観世流まじる　玉池：若葉家撰
祠掌の清臣さん　瑣細な無心口籠る　安楽：米斎撰

なお、祠掌は、明治四（一八七一）年に太政官布告で村社に置かれた下級の神官の職名。同二十七年に勅令で社掌に補され、昭和二十一（一九四六）年に廃止。

三　永坂石埭の撰句

石埭の狂俳の句は、末尾の表1「玉池仙館（永坂石埭）の狂俳一覧」で一覧し、気楽に作句した様子が窺えた。ここでは、石埭の好む傾向を知る一例として、石埭が名誉社員評者として『桑弧集』初編と二編で撰んだ各二十句を掲載順に紹介したい。

『桑弧集』初編より石埭の撰句

蓮飯　白瀧飛ばす雨誉る　若葉家
夢　附けと手紙で油団能る　五湖
水に移る提灯　名残惜しや魂送ッとる　花酔
蓮飯　像に手向た琵琶仕舞ふ　飛猿
夏の月　白檀呼んで葛西消す　瓢箪庵
余念なく　母衣蚊屋の愛覗いとる　三巴
転ばぬ先キの杖　牛乳と鶏卵続けとる　若葉家
アイスクリーム　寄ると夏痩競べ合ふ　飛猿
ヘコ理窟　振られる格備へとる　若葉家
悪縁　合乗りで来て後ロ弾く　古の幾
お株　笑ッた限りで幕しめる　飛猿
言語道断　悠気ァ悠気で言ッて居る　尾張　元水
ヘコ理窟　紙袋から牡蠣呑む　同　其風
しぐるゝ蝉声　散歩に普茶の腹こなす　瓢箪庵
蓮飯　膝へ切籠の明りさす　尾張　一笛
祝ふ誕生　褄とらぬ年ァ夏負けぬ　飛猿
合乗り　まだ毟り取る種がある　若葉家
口癖　死たい姑ト医者撰む　五湖
疑ひ過キ　惜しい番頭出さしたり　安楽
支那癖先生　冬至にや堅ふ朋友呼ぶ　三河　一聲

『桑弧集』二編より石埭の撰句

極采色の杉戸　朝湯の丁子薫ッとる　遠江　松蔭
死子殺世の中　分別もなう旅仕とる　松江女
三日前から　玉藻封じる別家集る　尾張　野冬
いちじるし　熱海戻ッて帯かける　年人女
あらぬ別れ　送られて又送ッとる　若葉家
奥の手　利付けして贋冠つて行　米斎
押付け堵　本家が涙飲せとる　若葉家
切る傘　腹で我物さらへとる　松江女
祠掌の清臣さん　英語こなして洋酒飲む　斐文
怖〳〵　貴女横鞍乗り習ふ　若葉家
から騒ぎ　部屋中で霜枯れ包む　尾張　竹の家
いちじるし　黴菌見せて病理説く　桜川
利己主義　位牌引取人が多い　若葉家
寝覚の千鳥　史料探ッて旅厭かぬ　古の幾
土瓶で蒸す松茸　秋外ァ宿帳付イとらぬ　三河　染色
分別ざかり　遊ひ丈け義務尽しとる　年人女
力負け　純羊毫て辞表書く　古の幾
極采色の杉戸　智識の八字霜深い　若葉家
ソレ見ロ　東京で小便仕て戻る　友月
奥の手　白痴を誉めて使ッとる　安楽

このように眺めてみると、気楽に詠まれた句が多い中、名誉社員講師の若葉家の句がよく撰ばれているように感じる。

因みに、この若葉家は「桑弧集」二編（明治二十一年十二月刊）の巻頭に掲げられた「作例一斑」の作者で、桑弧社の指導的立場にいた人物である。「作例一斑」は、後進のための作法書の一部であり、随所に桑弧社のめざす新しい時代にふさわしい冠句の形を述べたものである。

なお、「作例一斑」は、「東京 桑弧社のめざした「清警冠句」」（椙山女学園大学現代マネジメント学部発行「社会とマネジメント」第六巻二号 二〇〇九年三月）で紹介した。

石埭は名誉社員評者と肩書されるだけあって、若葉家の句をよく撰んでいるし、また若葉家によく撰ばれていることからも、桑弧社のめざした新しい狂俳の面白さをよく理解していたようである。思えば、生家のあった名古屋市西区周辺も、十五歳で曽我耐軒の門下で漢学詩文を学んだ岡崎も、狂俳の盛んな地域である。もしかしたら東京に出る前十代の頃に、狂俳を見聞きしていたのではなかろうか。

まとめ

石埭はおそらく同郷の安楽と親しかったのではなかろうか。安楽に誘われて桑弧社と関り、「清警冠句」と称した狂俳形式をよく理解し、気楽に楽しんだと思われる。

思えば、生家のあった名古屋市西区周辺も、十五歳で曽我耐軒の門下で漢学詩文を学んだ岡崎も、狂俳の盛んな地域である。もしかしたら東京に出る以前の十代の頃に、狂俳を見聞きしていたのではなかろうか。

また、山崎敏夫が知る石埭は、おそらく医師、書家、漢詩人としての石埭であったろう。しかし、狂俳形式をよく理解し、東京で桑弧社の名誉社員評者として認められ、気楽に楽しんだ石埭を見出すことができたことは意義のあることだと感じる。

注

(1) 山崎敏夫著『東明微茫』(山崎敏夫遺稿集　山崎敏夫先生記念会編　桜楓社　一九七九年)所収の荻野恭茂編「山崎敏夫年譜」参照。

なお、昭和四十一(一九六六)年四月から同四十四年三月に退職するまでの三年間、愛知県立大学長、県立女子大学長、県立女子短期大学長を兼務した。

(2) 注(1)参照。

(3) 山崎敏夫文庫本に貼付の記事。「鳥迹叙形／(一徑白雲の印影)一徑／白雲／辛亥八月　玉池老人篆／永坂周二君石埭と号し、居を玉池僊館と曰ひ、祭詩龕と曰ひ、星舫と曰ふ。名古屋の人、其刀圭界の泰斗、詩書の大家たるは夙に知る処、亦画梅を善くし、更に篆刻に妙を得たり。今年六十五。家住東京神田松枝町二十三」(辛亥は明治四十四(一九一一)年。刀圭界は医学の世界の意。)裏面の記事は、「●條件折衝困難(千代田東京瓦斯合併問題)」。千代田瓦斯と東京瓦斯の合併問題があったのは明治四十四年。同年八月二十二日合併締結。新聞は報知新聞か(未確認)。

(4) ブロマイド風の紙の寸法：二〇・五糎×一四・〇糎(写真一八・五糎×一三・三糎)「Mr. Nagasaka Sekitai, a Disciple of Chinese Poetry in his Chinese-styled Room」。

(5) 注(1)の「山崎敏夫年譜」の表記に従う。

(6) 安城市　吉沢聚湊蔵。

(7) 『下谷叢話』(岩波文庫　岩波書店　二〇〇〇年)第十四　九四頁。

(8) 「永坂石埭略伝」(六七頁)では、石埭が星巌の邸址を探り求めたのではなく、偶然であったことを、坪谷水哉「玉池吟社の遺蹟」(伊藤信氏著『梁川星巌翁：附紅蘭女史』(梁川星巌翁遺徳顕彰會発行　大正十四年刊)所収(国会図書館デジタルコレクションで閲覧可))を引用して紹介する

(9) 注(6)に同じ。「陶冶性霊」は、杜甫の『杜少陵詩集』巻十七解悶十二首　其七の七言絶句の冒頭。(『漢詩大観』中巻一三五五頁)。「陶冶性霊存底物。新詩改罷自長吟。熟知謝将能事。頗学陰何苦用心。」

(10) 安城市　吉沢聚湊蔵。

題辞　印

可無警句暦桑弧詞泓雖同禮自殊咲其風流余社未欲将魚目混驪珠　戊子十月

石埭居士并有于玉池之祭詩龕　印　印

(11)　注(6)に同じ。

(12)　木村芥舟（きむら-かいしゅう）一八三〇～一九〇一　幕末の武士。文政十三年二月五日生まれ。幕臣。軍艦奉行となり、万延元年遣米使節の随伴艦咸臨丸（かんりんまる）の提督として勝海舟らとともに太平洋を往復。のち開成所頭取、軍艦奉行、海軍所頭取を歴任。維新後は詩作、著述にしたしんだ。明治三十四年十二月九日死去。七十二歳。名は喜毅（よしたけ）。通称は勘助、摂津守。著作に「三十年史」。『日本人名大辞典』（ジャパンナレッジ）

(13)　注(3)参照。

(14)　「漢詩人永坂石埭」（一一七頁）に『石埭翁詩稿』十三冊（蓬左文庫蔵）の紹介がある。

(15)　「全国書画一覧」南北画大家之部〔一八八五（明治十八）〕に掲載。「東京　柴田芳洲」。https://www.tobunken.go.jp/materials/banduke/807156.html

「東京大画家派分一覧表」南宗派〔一八八九（明治二十二）〕に掲載。「佐久マ丁三　柴田芳洲」。https://www.tobunken.go.jp/materials/banduke/807146.html

東京文化財研究所　明治大正期書画家番付データベースより。

(16)　安楽、飛猿、五湖の居所は、「清警冠句桑弧集初篇課題」に記載のもの。

(17)　明治三十一年読売新聞連載「明治の江戸児」に載る当時六十四歳の国周の談話に、飛猿が青松庵飛猿という俳名をもつこと等が載る。森銑三「国周とその生活」七（『明治人物夜話』東京美術　一九六九年）所収。国周は三世歌川豊国門の浮世絵師豊原国周（一八三五－一九〇〇）。

（付記）

本稿を為すにあたり、貴重な資料をご提供いただきました吉沢義夫氏、東海近世文学会令和三年十二月例会での口頭発表（Zoom 開催）において、貴重なご教示をいただきました諸賢には心より謝意を表します。

＊　生活科学部　生活環境デザイン学科

表1　玉池仙館（永坂石埭）の狂俳一覧

○『桑弧集』初編～第13編中、玉池仙館の掲載句（ルビは概ね省略。異体字を含め漢字は原則として通行字体に改めた。）

通番	編別	題	付句	編	点者・○付数字は所載順	刊行年
1	1	蓮飯	白衣に蚊の血付ケて居る	初編	豊年評⑧	M21・10刊
2	2	支那癖先生	戸棚に昼寝して御座る	初編	五湖評⑤	
3	3	支那癖先生	紅の名刺で暑気見舞ふ	初編	五湖評⑮	
4	4	おチャラと頓子	馬の後足咥へ合ふ	初編	若葉家評⑩	
5	5	おチャラと頓子	連借の利に惘れとる	初編	庵千成評⑱・古の幾評⑰	
6	6	眉に皺	其先キ読で貰ツとる	初編	千成評⑬	
7	7	祝ふ誕生	御隠居先キへ酔ハしたり	初編	豊年評⑮	
8	8	妙	ヲレ倒せがる奴もある	初編	豊年評⑯	
9	9	妙	何が利ィたか内に寝る	初編	五湖評⑥	
10	10	夏の月	ヘボ碁の四天王揃ふ	初編	豊年評⑰	
11	11	ヘコ理屈	薩摩汁して書記招く	初編	古の幾評⑲	
12	12	慾	大垣ァ屋根で商法する	初編	一斎評⑰	
13	13	利ィた風	小さな声で諷ッとる	初編	其風評⑩	
14	14	捲上げた簾	一ト雨が秋見せて行	初編	安楽評③	
15	15	合乗り	朝顔三鉢萎れとる	初編	安楽評⑯	
16	1	祠掌の清臣さん	贊詞に観世流まじる	二編	若葉家撰③	M21・12刊
17	2	利己主義	無給で家扶の代仕とる	二編	若葉家撰③	
18	3	雫切る傘	在庵と札かけ直す	二編	千成評⑰・古の幾評⑮	
19	4	軸摺れの壁	糸に通して木の子干す	二編	豊年評⑭	
20	5	軸摺れの壁	匙と筮竹遊んどる	二編	湖夕評⑱・飛猿評⑬	
21	6	軸摺れの壁	彫さしの盆使ツとる	二編	安楽評⑳	
22	7	天長節	欠伸三ッで日が暮れる	二編	湖夕評⑤	

23	8	力負け	反対党になッて居る	二編
24	9	捨ても置けず	広告で見て代理出す	二編
25	10	捨ても置けず	午炮（ドン）聞てから蕎麦走る	二編
26	11	ソレ見ロ	官員録にや属とある	二編
27	12	手に提た菊	古戦場見に根津廻る	二編
28	13	自称紳士	義捐の相場聞に来る	二編
29	1	進歩ハ様々	教師に辞理勤めとる	四編
30	2	人真似	撲文字附の名刺出す	四編
31	3	大奮発	婆々も片側如源買ふ	四編
32	4	村での小町	榎の隠居痩らかす	四編
33	5	大人気者	自分て正誤出させに行	四編
34	6	黒板屏ヒヨロ松	明けてランプ燈つとる	四編
35	7	摘草	編み掛けの糸落したる	四編
36	8	幇間の里風	御前（ごぜん）と言ッて呵られる	四編
37	9	着物道楽	竺仙連きて土間に居る	四編
38	10	景久の雲雀	自園の朝茶誇ッとる	四編
39	11	いそ〳〵として	江崎へ見合写しに行	四編
40	1	波も一時	錆とる攘夷刀見せる	五編
41	2	生憎	閑のある時ァ金がない	五編
42	3	山師の大原	可笑な手帖忘れて行	五編
43	4	ヤレ嬉しや	人で戒檀めぐッたり	五編
44	5	見かけによらぬ	名刺に勲も刷てある	五編
45	6	手持無沙汰	引越した先き聞て居る	五編
46	7	巾広い新道	二頭の輾（きし）る砂利響く	五編
47	8	こよひの月	野営も喇叭吹きすさむ	五編

二編	斐文評⑬		
二編	五湖評③		
二編	安楽評⑥		
二編	五湖評⑪		
二編	神嘗小集抜粋⑤		
二編	神嘗小集抜粋⑦		
四編	若葉家評⑧	刊記欠	
四編	若葉家評⑩		
四編	若葉家評⑪・三川評⑰・斐文評④		
四編	若葉家評⑱		
四編	古の幾評⑨		
四編	湖夕評②		
四編	斐文評⑪・巴郎評⑪		
四編	五湖評⑲		
四編	安楽評③		
四編	巴郎評⑨		
四編	巴郎評⑯		
五編	若葉家評⑦	M23・6刊	
五編	若葉家評⑯		
五編	士心評③		
五編	士心評⑮		
五編	馨評③		
五編	斐文評⑥		
五編	五湖評①		
五編	安楽評①		

48	9	一口謡	化物後通り越す	五編	安楽評⑤
49	10	見て貰ふ方角	医者の方でも厭(あい)て居る	五編	安楽評⑭
50	1	灰吹の音	萩押分けて膳運ぶ	六編	附録月次集第五回抜粋①
51	2	杖曳く野辺	夕日に蝶の影痩る	六編	附録月次集第六回抜粋⑥
52	3	米櫃娘	不貞寝から熱誘引出す	六編	附録月次集第六回抜粋⑦
53	4	華長者	五月蠅て開け過て居る	六編	附録月次集第六回抜粋⑨
54	1	慰に彫る印	外科で近村鳴らしとる	七編	斐文評⑫
55	2	慰に彫る印	懲りて遊歴生泊めぬ	七編	安楽評⑥
56	3	垢抜け	気賀で一中うなつとる	七編	安楽評⑥
57	4	臑かちり	一字貰ッて前座出る	七編	附録月次集第七回抜粋⑲
58	5	帯	夜具と代ッて花見に行	七編	附録月次集第八回抜粋②
59	6	がつかり	書留で来て為換ない	七編	附録月次集第八回抜粋⑥
60	7	天窓て歩む人	蟻の話に耳とめる	七編	附録月次集第八回抜粋⑲
61	1	按摩の幇間	売て呉れもの著て来とる	八編	附録月次集第九回抜粋⑥
62	2	盆踊	総門高う月更ける	八編	附録月次集第九回抜粋⑬
63	3	甚兵衛の娘	十九で十九貫かゝる	八編	附録月次集第九回抜粋⑬
64	4	皆迄言ふな	奢る積りて出て来とる	八編	附録月次集第十回抜粋④
65	5	跡の祭り	釣り遣り過た嬶叱る	八編	附録月次集第十回抜粋⑤
66	6	感心な嫁	帰朝待ツ間に英語せる	八編	附録月次集第十回抜粋⑱
67	7	星	蔵から出した繻子泣ける	八編	附録月次集第十回抜粋⑲
68	1	誤	書類が先きに残ッとる	九編	附録月次集第十二回抜粋⑧
69	2	一代	殖しもせぬが減しもせぬ	九編	附録月次集第十三回抜粋⑧
70	3	高評	歌舞伎でスペンサー見せる	九編	附録月次集第十三回抜粋⑰

M23・10刊

M24・1刊

M24・4刊

M24・8刊